

今、教育に必要なものは

～独裁に抗う集団づくり～

2015.8.2 基調小委員会

1. いま、現場では何が起きているか

道徳の教科化、ゼロ・トレランス、〇〇スタンダード、未然防止という名の横並び指導の強要、『君が代』の強制、何でもかんでも起案などなど、教育現場に押し寄せてくる抑圧はあげればきりが無い。これと並行して沖縄の基地問題、福島原発問題、慰安婦問題、海外派兵問題、平和憲法改変などと弱者には目もくれず、全ては「国」のためと言いながら、かつて歩いた道に戻ろうとする波が押し寄せている。

この大きなうねりの中で、「荒れ・暴力・いじめ」の加害者とされる子どもたちは、なぜそうなったかという背景や理由を聞かれることもなく、いや聞かれたとしてもそれは考慮されずに排除の対象になる。そして、被害者を含め多くの子どもたちは、自分たちの仲間ですら起こった問題の背景を知り、再び同じことが起きないようにする解決の糸口を見つける自治のひとつを失っていく。

そこにあるものは、『問題を起こした異質な者は、排除されるのは自業自得である。』という不寛容が当たり前の世界である。そして、多くの子どもたちは、異質な者という烙印を押されないように同調競争を繰り広げ、率先して排除の側にまわるか、おかしいと思ってもその声を押し殺し黙っているしかない。この状況に異議申し立てを起こすものなら、教師であれ子どもであれ片隅に追いやられ、問題が起これば教育の場からも排除されかねないという抑圧の中で生活している。

この現状を予測したような記述が、文部省が著作した本に見ることができる。第二次世界大戦の敗戦を受けて、当時の文部省は「民主主義」という教科書をつくった。それを以下に紹介する。

2. 故きを温ねて新しきを知る！～「民主主義」(文部省著作)～抜粋

ポツダム宣言を受諾した日本は、帝国主義から脱して新しい民主主義の国を目指すという方向に舵を切った。そのとき、重要視されたのが子どもたちの教育である。将来を担う子どもたちの羅針盤となるような教科書を文部省はつくった。みなさんがよくご存じの「新しい憲法の話」とこれから引用する「民主主義」である。

これからの日本にとっては、民主主義になりきる以外に、国として立って行く道はない。これからの日本人としては、民主主義をわがものとする以外に、人間として生きて行く道はない。それはポツダム宣言を受諾した時以来の堅い約束である。

しかし、民主主義は、約束だからというのでしかたなしに歩かせられる道であっては

ならない。それは自分から進んでその道を歩こうとする人々に対してのみ開かれた道であり、その人たちの努力次第で、必ず繁栄と建設とに導く道である。日本国民は、自ら進んで民主主義の道を歩み、戦争で一度は見るかげもなくなった祖国を再建して、われわれ自身の生活に希望と繁栄とを取りもどさなければならない。ことに、日本を再建するというこの仕事は、今日の青少年諸君の双肩にかかっている。その意味で、すべての日本国民が、ことに、すべての青少年諸君が、この本を読んで民主主義の理解を深められることを切望する。そうして、納得の行ったところ、自分で実行できるところを、直ちに生活の中に取り入れて行っていただきたい。なぜならば、民主主義は、本で読んでわかっただけでは役に立たないからである。言い換えると、人間の生活の中に実現された民主主義のみが、ほんとうの民主主義なのだからである。

ところが、文明が向上し、人知が発達して来るにつれて、専制主義や独裁主義のやり方もだんだんとじょうずになってくる。独裁者たちは、かれらの貪欲な、傲慢な動機を露骨に示さないで、それを道徳だの、国家の名誉だの、民族の繁栄だのというよそ行きの着物で飾るほうが、いっそう都合がよいし、効果も上げるということを発見した。帝国の光栄を守るといような美名の下に、人々は服従し、馬車うまのように働き、一命を投げ出して闘った。しかし、それはいったいなんのためだったろう。かれらは、独裁者たちの野望にあやつられているとは知らないで、そうすることが義務だと考え、そうして死んでいったのである。

現にそういうふうにして日本も無謀きわまる戦争を始め、その戦争は最も悲惨な敗北に終り、国民のすべてが独裁政治によってもたらされた塗炭の苦しみを骨身にしみて味わった。これからの日本では、そういうことは二度と再び起こらないと思うかもしれない。しかし、そう言って安心していることはできない。独裁主義は民主化されたはずの今後の日本にも、いつ、どこから忍びこんで来るかわからないのである。独裁政治を利用しようとする者は、今度はまたやり方を変えて、もっとじょうずになるだろう。今度は、だれもが反対できない民主主義という一番美しい名まえを借りて、こうするのがみんなのためだと言って、人々をあやつろうとするだろう。弁舌でおだてたり、金力で誘惑したり、世の中をわざと混乱におとしいれ、その混乱に乗じてじょうずに宣伝したり、手を変え、品を変え、自分たちの野望をなんとか物にしようとする者が出て来ないとは限らない。そういう野望をうち破るにはどうしたらいいであろうか。

それを打ち破る方法は、ただ一つある。それは国民のみんなが政治的に賢明になることである。人に言われてその通りに動くのではなく、自分の判断で、正しいものと正しくないものとかみ分けることができるようになることである。民主主義は「国民のための政治」であるが、何が「国民のための政治」であるかを自分で判断できないようでは民主国家の国民とはいわれない。

前述のような波が押し寄せている昨今の状況は、まさに独裁政治が進みつつあるとい

う認識を持たなければならない。このような状況の中で、最も抑圧を受けている側から教育を見直そうという提起をし続けてきた京生研の実践は、まさにこの独裁に抗うものとして位置づけられるはずだ。これから取り上げる2本のレポートの主人公であるケイコと萌子は、発達に必要な保護や教育を十分に受けられず、現実の社会からまさに見捨てられようとしている。これらの実践がだれも見捨てない実践となり得ているのか検討し、これからの我々の実践の教訓としたい。

3. ケイコの実践から学ぶこと

ケイコの担任である秦さんは、転勤した年にケイコの兄を担任している。当初、荒れ続けるケイコの兄に寄り添う方針で臨み、個別接近に成功し信頼関係が出来つつあった。しかし、『きっちりさせなければならない』という学校体制の圧力の中でケイコの兄とぶつかり、せっかく出来つつあった関係がこじれていき、集団づくりに行き詰まった。この時期、京生研の仲間実践の分析を要請し、寄り添い続けるべきだという方針に舵を切り直した。秦さんは、転勤してきた当時の学校とその後をこう述べている。

この時の学校体制は、子どもに寄り添うことなく、保健室登校や別室での学習などを許さないものであった。私は、ケイコの兄を切り捨てることなく寄り添い続けたが、排除しようとする学校体制に従わないので担任が変わるように管理職から迫られ、保護者懇談会で担任交代が告げられようとした。そのとき、多くの保護者が「秦先生はよく頑張っている。何もしていないのは学校側だ」と支持を表明してくれたおかげで担任交代は撤回された。

秦さんの学級は落ち着きを取り戻していくが、卒業間近に他の学級が荒れ始め、卒業式練習もまともにできなかった。この年は、管理職も含めて教員の半数近くの異動があった。また、ケイコの兄たちは、中学校でも排除され続け、保護者と共に中学校に敵意をむき出しにして、大変困難な状況をつくりだした。

その後、生徒指導主任を引き受けることになり、ケイコの担任をもつ代わりに荒れている子に寄り添う方針を合意してもらい、今はケイコらを排除せずにかかわり続けることができるようになっていく。

秦さんが、困難な中でも切り捨てることなく寄り添い続けた実践は、当事者である子どもや保護者から信頼され、学校全体の秩序を守るためには、大きな課題を持つ子どもを排除しようとするゼロ・トレランスの方針は、撤回されているのである。さらに、生徒指導主任を任されるということは、その後の学校の方針をも変えたということがいえる。この兄への実践があり、秦さんはケイコの実践を旺盛に展開できた。また、秦さんが、困難な状況でケイコの兄に寄り添い続けたとき、京生研の仲間が分析と方針を出す相談に乗っている。

ケイコやケイコの兄のしんどさはどこにあるのだろうか。ケイコの両親は、外国籍の方で自身もこの地域で学生時代を送っている。この両親も差別と貧困の中でまさに発達

を阻害されてきたことは容易に想像がつく。そして、父親には学校教育に対する恨み辛みまでが見え隠れする。これは、ケイコの兄や従兄弟が中学校で破壊的行動を取り、その行動を後押ししている父親や叔父の行動から読みとることが出来る。しかし、この状況で、ケイコの兄に寄り添い続けた秦さんの実践は、今まで排除されてきた経験しか持たないケイコの兄や保護者の信頼を得、少なくとも敵対者として登場することはなくなっていた。

小5の時には、秦さんの集団づくりの中で前向きに集団の中で過ごしていたケイコであるが、両親の離婚により、自分を大事に育ててくれた母親が家を出たことにより、将来の展望が消えてしまい自暴自棄になっていく。これは、遅刻が増え、学級の仲間と過ごすことがほとんどなくなり、ヤンチャな中学生の女子とのつきあいが深くなっていくことから読み取れる。崩れていくケイコに対して、秦さんがどんな姿勢で寄り添っていたかを象徴する場面がある。

近くの中学校から学校に「正門の前で、ケイコら女子2名と男子2人が入ろうとして、外をウロウロしている。」と連絡が入った。教頭と養護教諭が現場に行くと警察官2人と生徒4人が、帰る・帰らないで押し問答をしていた。中2の男子は、すぐに帰ったようだが、女子2人は警察と押し問答をくり返していた。中学生の女子はタバコを吸いだして、警察の高圧的な指導に対して、挑発するような態度をとっていた。しばらくすると、男子から女子のスマホに連絡が入って女子2人も待ち合わせの場所に行った。

その後、ケイコと中学生が学校に入ってきて、職員室の前のソファに座っていた。ちょうど、ケイコの給食を持って降りてきたところだったのでそこで話した。最初、ケイコと中学生の前に立つとにらんできた。

T「話聞いたで。友だちのために応援しに行ったげるのはえらいな。でも、平日やし入れへんしな。仕方ないな。給食食べるか？魚嫌いとか？」

ケイコ「ううん。食べれる。」

T「ごめんな。給食一つしかない。あっ牛乳やったらあるけど、飲むか？」

中学生「うん。」でも、一口飲んで久しぶりに牛乳飲んだけどまずいと言って残した。

T「お腹すいてるやろ。昨日のパンの余りがあるかもしれへんけど食べるか？」

中学生「食べる食べる。」

T「ちょっと待っときな。」

おいしそうに笑っていた。

中学生は、転入して友だちがはず、遊ぶのは他校の生徒で、学校では居場所がない。学校にはもどりたくないということだった。

高圧的な対応をする警察の目の前で、喫煙をはじめ挑発する子どもたちは、これらの大人たちが自分たちを保護し、育ててくれる他者ではないと認識していることは明白である。いや、これらの大人を自分たちを抑圧し排除する存在であるとしか見ていないの

である。

これに対して、秦さんはにらんでくるケイコたちに対して、否定的な行動に見える他校訪問に対して「応援しに行った」という肯定面を評価し、平日は入れないと方法が間違っていたことで諭している。そして、彼女たちの食事を心配するのである。この秦さんの指導は、彼女たちのつっぱらなくてよい子どもらしさを引き出し、教師の指導に従わないということで学校から排除され、友達もできず居場所がないという中学生の本音を引き出している。もし、この中学生の本当の願いに寄り添える教育が学校に存在すれば、彼女たちは浮遊する必要はないのだ。

さまざまな逸脱行動を取るケイコらを排除しない方針を職員会議で認めてもらい、ケイコの居場所を学級につくろうとした秦さんは、養護教諭に協力してもらいながら実践を積み重ねていく。また、家庭訪問で父親や兄とケイコを登校させることでの協力や運動会における叔母の協力など、ケイコを温かく見守る身内を増やしている。そして、学級内では、どうすればケイコが、学級集団に入っていけるのかを子どもたちと相談し実行している。まさに「ケイコを排除しないことで、学級に自治を立ち上げようとしている」と見ることが出来る。

しかし、秦実践で気になるのは、ケイコ以外の他の子どもの本音が見えてこないことだ。「先生は、ケイコのことばかりやん。登校しないのも他校生とつるむのもケイコのがままやん。私らが何でケイコの心配ばかりせなあかんねん」という叫びはなかったのだろうか。学級の子どもたちが、秦さんの指導を全面的に受け入れていることで、こういう声は出せなくなったのではないか。

子どもたちが、自分たちの仲間の問題を、自分たちのこととして受け入れ話し合い、改善策を探していくという学級内自治が進むとき、前述のような不満は当然出てくるはずだ。その不満にどう応え自分の問題としてとらえ直していく過程において、学級内自治は真実味を帯び、そこに参加する子どもたちは真の自治を手に入れ自立の道を歩み出すはずである。

4. 萌子の実践から学ぶこと

萌子は、小学校から学級崩壊の中心メンバーだった。彼女は、小中連携で小学校を訪ねた中学校教員の目の前で、「死ね」「きしょい」の暴言を言い放ち、算数のドリルを引きちぎって教室にばらまいたという萌子たちは、中学に入学後も2年に進級するときに学年教師が総入れ替えになるほどの学年崩壊状況をつくりだしている。

九条さんは、3年生を卒業させてこの学年に所属するが、当初は萌子がこれほどの課題を背負っているとは分析していない。それは、萌子ほどの子どもが浮上してこないほど学年全体が荒廃していたのだ。

九条さんたちは、普通の学校生活を送れるように「前年度の反省を踏まえ、学校全体の秩序を回復するため、昼食は全校一斉に班体制とし、終学活は、生徒の司会による反

省会とし、形を全校的に作り上げた。」

この方針に対して、管理的ではないかという指摘があったが、九条さんたちは、この初期の管理だけで終わることなく、同時並行で学年リーダー会を立ち上げ、子どもたちの自治を中心にした学校づくりを目指している。何よりも、この思い切った方針により、学校が普通に生活できる場所になり、最も課題の大きい萌子の課題が見えるようになってきたのだ。

九条さんたちは、周りが落ち着いていく中で、最後までトイレに籠もり教師反抗をくり返し、学級の取り組みに参加しない萌子の実践分析をサークルで論議してもらった。その中で、萌子の荒れを分析するために必要な情報が不足しているのではないかと指摘された。サークルでの指摘を受け、担任と共に母親に会い、祖父の協力を得、養護教諭の情報を共有し、ケース会議を開く。そして、つっぱり学習会の開催と次々と実践を重ね、萌子を次のように分析するに至っている。

もともと他者との関わりが弱く、そこに恐怖体験、虐待が加わり、自尊心が失われるなか、かたや一方では、精一杯「教師反抗」という形で、自分の「救い」を求め、かたやもう一方で、教室にいるうらやましい仲間と一人寂しい自分のギャップを埋め、心を落ち着かせるため、トイレにこもるという非常手段を取り、自分の精神を安定させているということにより気づいた。そして、萌子を自立させていくことは、さらにどんな実践が有効なのか模索し始めている。ツッパリ学習会を複数開催し、一方で活発にリーダーを育てている。このツッパリ学習会は、学級でのリーダーを含めた学習会、勉強ができずに苦しんでいる他の子たちを巻き込んだ学習会に発展させることが自分たちの構想である。

子どもたちの分析がないとき、その子どもに良かれと思っている実践でも、子どもの変化に振り回され有効ではないとあきらめたり、変化がないのでもうダメだと見捨ててしまい消耗してしまうことがある。それに対して、状況を分析し実践を積み重ね、総括していくというサイクルがあれば、どんな子どもでも見捨てることはないし、消耗することも少ない。それには、サークルでレポートしていくことが有効であることも示している。

5. 独裁に立ち向かう実践の構想とは

秦さん、九条さんが提起してくれたように、最も困難な課題を抱えた子どもを切り捨てずに自立を支えようとしたとき、多くの大人や子どもが関わり、学校そのものを変えようとする力が働いていることがわかる。こういう協働の力をつくりあげることによって、独裁と対峙できるのではないかと思うのである。

実践的には紹介できなかったが、独裁的な学校体制が進む中で、体制の枠に入れられない子どもたちが不登校に追いやられている現実も見逃せない。私たちの仲間は、この不登校問題について、その原因を洗い直し、『なぜ不登校になっているのか』を明らかにし、

この不登校に追いやられた子どもたちが登校できるような実践をしていく過程に、独裁的な状況が進む体制を変えていく新たな道が開かれるのではないかと模索を始めている。

さらに、地域生活指導に奔走する私たちの先輩からのメッセージがある。M子は、両親が事業の失敗から離婚せざるを得なくなり、母親はアルコール依存と鬱病の中でネグレクトになり、非行の道に追いやられた。また、ゼロ・トレランス体制の学校からも排除され、社会からも排除されかけている子どもである。このM子に寄り添いながら、自立を支援する藤木さんは、次のようなメッセージを寄せている。

「M子の担任が私なら、M子は今も学校に在籍していると思う。そのために、M子に寄り添い、M子を受け入れる体制を学校につくり、M子を受け入れる学級集団を育てる努力をする。その教育としてのM子への指導を担保に、祖父に養育を決意していただくように働きかけるであろう。同時に生活保護のワーカーを起点に、母親のアルコール依存・鬱病の徹底的治療を行政に働きかけ続ける。

M子にとっての学校と母親にとっての福祉を中心的にケースワークするSSWは必要である。SSWは現職教員であり、行政の立場に位置するのがいいのではないと思う。」

そのために、

- ① 最も困難な課題を抱える者に目を向けよう！
- ② おまかせ民主主義からの脱却しよう！
 - ・職員会議では、質問する事からはじめよう！
 - ・集団づくりでは、「話し合って決め、実行する」ことを追求しよう！
 - ・子どもたちの世界に自治（自分たちの生活を、自分たちの手づくりあげる）を育てよう！
- ③ お互いの実践を交流し、先進的な取り組みを学ぼう！
 - ・教研やサークルで学ぼう！
 - ・実践を積極的にサークルでレポートしよう！
 - ・実践の結果によって評価される現場で、彼や彼女たちの自立はどういうことだという世論を起こそう！
- ④ 地域生活指導運動に積極的に関わろう！
 - ・地域生活指導運動は、退職した者だけが担う指導ではない。今の現場の閉塞性を考えると、現場にいる私たちが積極的にその有効性を利用しよう！

文責 牧本富雄